

〔解説〕 平定苗疆戦圖

高田時雄

苗（ミャオ）は古い民族である。『尚書・舜典』にすでに「三苗を三危に竄^おう（放逐した）」とあり、『史記』「五帝本紀」はそれを敷衍し、江淮や荊州を根據地としてしばしば叛亂を起こした三苗を、舜の建言によって三危山に遷したと述べている。三危山の位置については議論があって、敦煌だという説もある。『史記』では、三苗はその後西戎に變じたというのだから、その放逐先が西方にあったことは間違いないが、叛亂地點が江淮や荊州、つまり淮河以南の揚子江流域から湖北一帯であったとすれば、その民族は中國南方に廣く分布していたのであろう。三危山に遷されたのは首謀者をはじめ一部に過ぎず、民族の本體は故地に残留したと考えるのが自然である。いずれにせよ古代の傳説に屬する話であって、これを現代のミャオ族に直接結びつける根據はない。

しかしミャオ族は、中國國內は南方各省、さらにタイ、ミャンマー、ラオス、ベトナムなど東南アジア諸國にも廣く分布していて、古來遷徙を繰り返してきたことを思わせる。その中でも湘西（湖南西部）から黔東（貴州東部）にかけて苗嶺山脈を中心とする一帯は古くからミャオ族最大の居住地であった。歴代王朝はここに直接統治を及ぼすことがなく、いわゆる化外の地として放置されてきたのである。この地帯は中華帝國の中にもありながら、ミャオ族の自治に委ねられた獨立國家であったと言ってもよい。明末以來中國に渡來して布教に従事したヨーロッパのカトリック宣教師たちも、この事實はよく知っており、彼らのもたらした情報に基づいて描かれた中國地圖にはこの地域を“Sen-miao-sé indépendans”（獨立生苗子）とするものがある（圖1）¹。もちろん“王化”に浴した“熟苗”は中央政府の指導によって、漢風に染まり漢人に近い生活を営んでいたが、“生苗”は頑強に“王化”を肯んぜず、しばしば叛亂を起



圖 1: 獨立生苗子

¹ Carte de l'empire de la Chine, par E. Mentelle & P. G. Chanlaire, Paris, An XII (1793-1794).

こした。そのため明代から清代にかけて、政府はこの地域に全長370里に及ぶ“邊牆”を築いて、漢人居住区域と苗疆とを隔離した。これは南の長城とも呼ばれ、近年注目を集めている²。

ところが清朝の雍正年間に改土歸流政策が施行されると、情況は著しく變わってきた。改土歸流は苗疆に一定の社會經濟的發展をもたらしたことは事實だが、漢族が大量に入り込んできたことで、少数民族に對する政治的文化的壓迫が強化された。ミャオ族は窮乏化し、清朝の役人や地主に對する不満は頂點に達したのである。かくして苗疆の戦争が引き起こされた³。この戦争は乾隆のいわゆる“十全武功”には數えられていない。しかし乾隆が信賴して止まなかった重臣の福康安を失うなど、その叛亂制壓には多大の犠牲を餘儀なくされ、心身を勞すること著しいものがあつた。乾隆が西域、金川、臺灣、安南などとともに、その情景を銅版畫に彫らせたのには、やはり理由のあることとせねばならない。「平定苗疆戰圖」は次の16圖からなる⁴。

- 1 (1)「興師」
- 2 (2)「剿捕秀山苗匪至湖南界」
- 3 (4)「攻克椽木山」
- 4 (3)「大剿逆苗攻解松桃之圍」
- 5 (6)「攻克蘭草坪滾牛坡剿戮苗衆」
- 6 (5)「大剿土空寨苗匪解永綏城圍」
- 7 (7)「攻克黃瓜寨賊巢」
- 8 (8)「攻克蘇麻寨一帶賊巢」
- 9 (10)「攻克高多寨生獲逆首吳半生」
- 10 (9)「攻得茶它柳尙等處賊巢」
- 11 (11)「攻克廖家冲生擒首逆石三保」
- 12 (14)「官兵攻克平隴賊巢」
- 13 (15)「捷來」
- 14 (16)「攻克石隆苗寨陣斬石柳鄧」
- 15 (12)「收復乾州」
- 16 (13)「攻克強虎哨」

²劉新華・劉建華「中國明清“南長城”」『銅仁學院學報』2008年第1期、43-49頁；蘇利嫻「苗疆邊牆設置及其與明王朝經營西南的關係」『貴陽學院學報（社會科學版）』2009年第3期、36-39頁。

³ミャオ族の反亂は、民間傳承に“三十年一小反、六十年一大反”というとおりで、この戦争以外に、大きなものとして、遡っては雍正13年から乾隆元年にかけて貴州東部の九股苗民の叛亂があり、降っては咸豐同治年間の張秀眉を指導者とする叛亂がある。とくに後者はきわめて規模の大きなものであつたと傳える。

⁴括弧内の數字は正しい順序。後文を参照。

以下、順を追って戦争の展開を見ていこう⁵。ただしロシア科学アカデミー所蔵の圖冊は圖の排列に若干問題がある。これについては必要に應じ文中で言及する。

擧兵

この叛亂には伏線があった。それは乾隆 56 年（1791）に起こった勾補事件というものである。何人かの“客民”（新來の漢人）が苗疆で耕作用の牛を仕入れて、漢人區に運んで販賣しようと、鳳凰廳（現在の湖南省鳳凰縣）の勾補寨附近に差し掛かったところ、一群の賊に襲われ、牛を奪われた。近くの栗林汛守備隊の把總（最下級の軍官）劉成玉と配下のものが駆けつけ、事件の處理に当たったが、彼らは有無をいわず、勾補寨の苗民の仕業と決めつけ、賠償を迫った。日頃からの不満もあり、石滿宜や劉官音たち苗民の抗議はやがて武力反抗に發展することになる。この地域の軍事據點鎮筵鎮（鳳凰縣城に駐屯）では、苗疆一帯に戒嚴令を出すとともに、800 名の兵を繰り出し、さらに永綏協からも兵 500 の出動を仰ぎ、勾補の彈壓に向かった。勾補上、中、下の三部落は火に包まれて炎上した。抵抗した石滿宜たち 15 人は鴨保（鴉保）寨の副百戸で苗族の吳隴登の家に隠れたが、清兵が鴨保寨を包圍したので、出頭して捕らえられた。逮捕者は勾補寨の苗民を含め 130 名にのぼったという。石滿宜たち首謀者はやがて凌遲刑に處せられ、他の逮捕者も生きたまま焼き殺された。この事件が導火線となった⁶。

勾補事件によって、苗民たちは團結して事に當たる組織の重要性を認識させられ、また清軍に對抗する武器を備える必要も痛感した。かくして各地の苗民は祕密裡に聯合を模索しはじめる。傳統的なミャオ族社會組織である“鼓社”や“款會”が復活した。前者は“合鼓”とも稱する、血縁關係を基礎とする集團で、宗祀の維持を目的とし、長老を主催者として集會を開き、親族の結束を確認する。集會が終わると太鼓を叩き音樂を奏でて踊り、歡を盡くすのである。また後者は同じく“合款”とも言い、こちらは地縁による親睦團體である。同じミャオ族の者

⁵史料としては、まず叛亂平定直後に編纂された『欽定平苗紀畧』や『清實錄』の記載があるが、『清代前期苗民起義檔案史料』上・中・下冊（1987 年、光明日報出版社）の「七、乾嘉苗民起義」（中冊 163 頁～下冊 438 頁）に収録された檔案が根本史料として重要である（以下、引用に際しては『檔案史料』と略稱する）。より簡便な史料集としては『乾嘉苗民起義資料專集・第一輯』（1985 年、湖南省花垣縣民族事務委員會、同縣政協文史資料研究委員會）がある。また吳榮臻『乾嘉苗民起義史稿』（1985 年、貴州人民出版社）は要領よく事件の顛末を紹介している。小文でも檔案と矛盾しない限り、しばしばこの書を利用した。魏源『聖武記』の關連記事はごく短いものだが、全體の流れをつかむには役に立つ。嚴如煜『苗防備覽』の著者は叛亂平定にも參加した經驗をもち、この地域の地理風俗等を詳細に記述する。特に苗疆の地圖 13 幅はすこぶる有用である。さらに『鳳凰廳志』『乾州廳志』『永綏廳志』『銅仁府志』など、この地域の方志にも關連する記述が散見する。

⁶魏源の『聖武記』「乾隆湖貴征苗記」もこの事件によって「苗禍が已に^{はら}んだと指摘する。

たちが集まり、血を啜って誓いを立て、治安と生産での協力を確認し合うのである。参加する寨（部落）の数は一寨から、多い場合は時として數百に及ぶこともあるという。なかには昂揚した擧げ句に“登仙”し、“苗王”を稱する者も出現するようになった。“登仙”は清朝側の史料に見える供述書では“發癲”と書かれている⁷が、神のお告げとして“客民”を放逐し、奪われた土地を取り返せと煽動した。“登仙”した者は、自在に武器をあやつり、卓越した武藝を發揮するのである。

今次の叛亂の首謀者たちは、こうした機會を通じて着々と連絡を取り合い、乾隆60年（1795）2月6日に一齊蜂起を行う計畫を練り上げていた。それは湖南永綏廳黃瓜寨の石三保、湖南乾州廳平隴の吳八月及びその息子の吳庭禮（吳廷禮）、吳庭義（吳廷義）、貴州松桃廳大寨營の石柳鄧及びその堂妹といわれる石七妹、貴州鳳凰廳蘇麻寨の吳添半（吳天半）、同じく鳳凰廳鴨保寨の吳隴登といった面々である。

ところが同年正月、首謀者の一人石柳鄧の動きが、松桃廳（貴州省銅仁地區松桃苗族自治縣）駐屯軍の千總（下級軍官、把總よりは上位）楊芳に察知され、ついで長官の孫清元に伝えられた。孫清元は一驚して、同月16日の早朝に機先を制して大寨營の石柳鄧を300名の兵によって急襲した。不意を突かれた石柳鄧や石七妹たちは、急遽應戦するものの、戦い利あらず、子供たちや近親もろともに血路を切り開き逃亡した。しかし妻の龍氏が戦闘中清軍に殺され、生け捕りにされたものたちも斬首された。孫清元は石柳鄧を追跡する一方、事の次第を上級官廳に通報した。貴州巡撫の馮光熊は知らせを聞くや、すぐさま鎮遠鎮の總兵（軍鎮の指揮官、正二品）珠隆阿に掃討を命じ、次いで貴州提督彭廷棟とともに自ら大軍を率いて増援に向かった。

遁れ出た石柳鄧たちは湖南永綏廳土孔（土空）寨の龍長受の家に留まって、近邊の各寨と連絡を取り合った。とくに石三保の支持のもと、彼らは湖南の起義軍數百とともに、22日大寨營に取って返し、大塘汎の砦を陥落させ、さらに清軍の據點に猛攻を仕掛けたのである。附近の苗民は石柳鄧が歸ってきたと聞き、續々と呼應して石柳鄧の指揮下に集まってきた。

湖南でも石三保が逸早く起義を宣言し、蜂起の炎は省境を越えて燃え擴がっていた。永綏廳の同知彭鳳堯は石三保起義の知らせを聞き、600の兵で石三保の捕縛に向かった。石三保の甥の石有保は、石三保の有力な助手であったが、若さによる客氣にはやって、敵の奸計に陥り、雅西（鴨西、鴉西）汎で捕らえられてしまった。それを聞いた石三保は正月の18日、黃瓜寨で“苗王”を名乗り正式に旗を擧げ、清軍の一大據點雅西汎を目指した。

一方、鎮筰鎮の總兵明安圖は、貴州で苗族が叛亂を起こした報告を受けており、

⁷例えば乾隆60年12月22日の「吳八月供詞」には次のようにある：「去年十月内、聽見各寨苗人都出了癲子、發癲的時候、就要刀弄槍、口裡嚷著要殺客家。」『檔案史料』下冊、141頁。

叛亂が湖南にも波及することを恐れ、すでに出動をはじめていたが、いよいよ石三保が擧兵して雅西に向かっていると聞き、永綏協副將⁸伊薩納とともに雅西を目指し、近邊の兵營からも増援部隊の派遣を命じた。かくして雅西の戦いの火蓋が切って落とされる。

起義軍側では、呉八月、呉隴登、呉添半等が一齊に呼應し、苗民を糾合、彼らは正月21日、栗林で石三保と合流、まず栗林汛を陥落させた。石三保はすでに黃瓜寨で伊薩納の攻撃を打ち破り、西から雅西汛に進軍、呉隴登、呉庭禮、呉庭義等、鳳凰、乾州の起義軍は東から雅西に殺到、呉添半は敵を食い止めるため南に布陣した。かくして三方から雅西への猛攻が開始されると、蒙古旗人で金川討伐にも参加した経歴をもつ百戦練磨の明安圖もやや臆するところがあったか、伊薩納とともに永綏城へ撤退して援軍を待つことにした。23日、夜陰に乗じて脱出、排打扣まで来たところで食糧に窮し、附近の苗族農民に媾和を申し入れた。農民たちが、苗疆の土地を返し再び侵犯しないという媾和条件を信ずるはずもなく、食料を與えないばかりか、刀を執って清軍に襲いかかった。這々の體で尙まで逃げ延びたところを、石三保の配置した伏兵が襲いかかり、ついに明安圖は討ち取られ、全軍1400餘名が壊滅してしまった。苗疆の戦亂における初期のクライマックスは、こうして叛亂軍の全面的勝利に終わった。しかしこれが清軍の本格討伐を促したことは明らかである。

叛亂の擴大と清軍の討伐

雅西の戦のあとも、起義軍の勢いは止まるところを知らない。雅西には息子たちを派遣しただけで、平隴に留まっていた呉八月は三岔坪の呉庭擧とともに乾州廳城の攻略を目指した。そこに雅西の戦を早めに離脱した呉庭禮、呉庭義、それに呉隴登が加勢に駆けつけ、23日、乾州城への總攻撃がはじまった。乾州城の遊撃將軍陳綸は、金川、臺灣にも従軍した歴戦の勇士だが、明安圖の増援に向かったところを、すでに兩岔溪で呉八月の伏兵に襲われ、重傷を負って、乾州城に運び込まれていた。そんなわけで乾州廳同知の宋如椿は農民軍の攻撃を前に爲す術を知らず、狼狽するばかりであった。そこへ進言する者があり、貶せられて故郷のこの地に隠退していた、もと廣東遊撃將軍王乙魁に助力を求めた。武藝に自信のある王乙魁は、一も二もなく應諾し、にわか仕立ての農民兵を蹴散らさんものと、城から打って出て戦った。混戦すること二刻に及んだが、ついに打ち破られ

⁸清朝の兵制では各省を守備する綠營兵の兵團は、標、協、營、汛の順にランク付けされ、それぞれ標は総督、巡撫、提督、総兵の、協は副將の、營は參將、遊撃、都司、守備の、汛は千総、把總の指揮下にあった。永綏には第二ランクの協が置かれ、副將伊薩納に指揮されていたわけである。

て城に逃げ歸った。やがて起義軍が城壁を越えて突入すると、宋如椿は最早これまでと思い定め、金印を巡檢の江瑤とその息子の江朝棟に託し、辰州府に救援を求めさせた。しかし城を北に出たところで、呉庭擧に捕縛され金印は起義軍の手に落ちた。宋如椿は妻を斬って自害し、王乙魁は捕らえられた。

呉八月と呉隴登はさらに苗疆最大の軍事據點である鎮筵城すわなち鳳凰廳城をめがけて前進した。総兵明安圖はすでに陣没したものの、ここの兵力は7千、堅固な石造城壁は周囲4.7里、10座の砲臺を備えている。鎮筵道員田灝はじめ文武官員は、附近の府州からの援軍を待ちつつ、この城を守り抜こうと決死の覚悟であった。苗民起義軍は正月28日、総攻撃に移った。呉八月は沱江の北岸をすべて支配し、そこから南に橋を渡って城に突入しようとするが、清軍もそれはさせじと必死に防戦、沱江は血に染まった。やがて敵は支えきれなくなり、城内に逃げ込むのを、起義軍は火を放ってこれでもかと攻め立てる。しかしやがて日暮どき、沅州と巖門營から清軍の援軍が城の東郊に到着する。起義軍は腹背両面の敵に挟まれ、消耗甚だしく、もう一步のところまで撤兵を餘儀なくされた。

鎮筵城を陥落させることこそ出来なかったものの、呉八月はそのまま包圍を繼續すると、さらに東に向かい、麻陽、辰溪、瀘溪縣の村々を攻略していった。湖南巡撫の姜晟は急ぎ辰州府まで出て、叛亂の動向を見守った。

こうして苗民起義軍は“逐客民、復故地”のスローガン通り、各地で土地を奪い返し、同時に苗奸（苗族で朝廷に協力したもの）たちを處刑した。

一方、貴州側でも起義軍は勝利していた。石柳鄧が大塘汛を攻略すると、烏羅や印江、さらに四川の秀山などの苗民が呼應して擧兵した。石柳鄧は松桃廳東北部の清軍を平らげ、その勢力範囲は四川及び湖南の起義軍と接するに至った。雅西戦後、湖南の石三保は兵を二分し、半ばを永綏廳の攻略に振り向ける一方で、半ばを貴州に投入、石柳鄧率いる黔東（貴州東部）起義軍と聯合した。また同じく呉添半の軍も貴州の銅仁府に向けて進軍した。かくして石柳鄧、石三保、呉添半それぞれの軍が互いに協力しながら別路を進み、清軍の據點である松桃廳、盤石營、正大營に對して攻撃を行った。2月初め頃には貴州全域に起義軍が展開し、もはや清軍はこれらの要塞に籠城を餘儀なくされていたのである。戦闘はこれらの據點及び銅仁府の攻防が焦點となっていた。盤石營には石三保の部隊が、正大營には呉添半の部隊が果敢な攻撃を仕掛けていた。松桃廳から救援の要請を受けた貴州巡撫の馮光熊は、鎮遠鎮の総兵珠隆阿に出動を命じるとともに、自身も討伐に乗り出した。盤石營の救援に向かった珠隆阿は椽木山⁹で石三保の伏兵に遭ったが、激戦の末に辛うじて遁れることができた。そしてその後、氣の弛んだ石三保の陣を

⁹椽木山は同名の山が2つあるので、紛らわしい。一は湖南と貴州の境界、一は貴州と四川の境界で、ここは前者である。呉榮臻『乾嘉苗民起義史稿』50頁脚注を参照。

残兵を率いて夜襲し、盤石營に入った。また正大營は堅固な石造りの要塞であったが、呉添半の猛攻でまさに陥落寸前、そこへ珠隆阿が盤石營から救援に向かう。しかし珠隆阿はまたしても石三保たちに攻圍され、ようやく正大營に逃げ込む有様であった。起義軍の攻撃は激しく、その擲げ込む火球によって營内は炎上、多くの官兵が焼死した。珠隆阿は鎮筮鎮に救助を要請するが、鎮筮鎮もそれどころではない。2月6日、珠隆阿は貴州提督彭廷棟に傳令を送り、事態を報告する。その頃、彭廷棟は貴州巡撫馮光熊とともにすでに銅仁府に入っており、すかさず討伐に進發、かくして呉添半率いる起義軍とのあいだに7日に及ぶ激戦が繰り広げられた。

一方、松桃廳は石柳鄧や石七妹たちの擔當であった。彼らの部隊はすでに四川の秀山以南の廣い範圍を制壓しており、いまや松桃廳城に猛攻を仕掛け、城内を占據したが、都司の孫清元たちは文武官員とともに南門外の雲落屯（雲蘿屯）頂に立て籠もった。ここは四周絶壁の要害で、攻略は容易でなく、攻圍は半月近くに及んだ。

このようにして銅仁府と松桃廳などを中心とする攻防は、起義軍優勢のまま推移していた。北京の朝廷には、湖南、貴州各地より危急を告げる奏折が續々と到着する。事態の深刻さを覺った乾隆は、終に本格的な鎮壓を決意する。2月9日、雲貴總督の福康安に現地への出動を命じ、13日には更に「必須厚集兵力、方可一鼓殲擒」（兵力を集中せねば、一擧に殲滅はできぬ）と訓示した¹⁰。金川、臺灣、安南、廓爾喀などすべての戦役で核心的役割を演じた福康安は、乾隆にとって最後の切り札である。さらに四川總督の和琳に命じて福康安を補佐させた。和琳は時の宰相和坤の弟で、文武に秀でた有能な將軍である。他にも、兩廣總督畢沅、湖廣總督福寧をはじめ、雲南、貴州、四川、湖南、湖北、廣東、廣西の7省から、のべ18萬の兵を動員して、苗疆の本格討伐が開始された。2月14日、福康安は銅仁府に到着した。銅版畫の【第一圖】「興師」は恐らくその銅仁府城からの出撃を描いたものであろう。この圖に附された御製興師二十韻の序にも「命福康安等統兵進剿」（福康安に命じて兵を統べ進み剿たしむ）とある。

福康安が銅仁府を出て西南方面から盤石營、正大營への攻撃を開始したのに對し、和琳は西北方面から四川の秀山に進軍した。大軍の到來によって貴州一帯の局面は一變、農民起義軍は各地で劣勢に立たされた。戦場は血に染まり、苗兵の尸體が累々と連なった。

正大營では、福康安の攻撃を支えきれなくなった呉添半が撤兵を考えているまさにその時、呉八月の指示で呉庭禮、呉庭義が救援に馳せつけ、戦列に加わった。

¹⁰ 「諭福康安等速將官兵何日齊集進剿事具奏」『檔案史料』中冊、178-179、187頁。

起義軍と清軍は激戦を繰り広げ、双方とも多くの兵士が死傷したが、衆寡敵せず、正大營は2月半ばには清軍の手に落ちた。大勢が決したと見るや、福康安は本隊を迂回させ桃映、石峴を経て、松桃廳城の攻略に向かった。起義軍側も石柳鄧が急ぎ松桃一帯に展開して防戦につとめる。清軍の主將は、勇猛を以て知られた貴州安龍鎮の総兵花連布、起義軍が苦戦を強いられているところへ、雲落屯の山頂に立て籠もっていた孫清元らが打って出たため、石柳鄧は散々に打ち破られてしまった。松桃に到達するまでは險阻な地形に悩まされ、途上しばしば苗兵との戦闘を経たものの、松桃に着いてからの解圍は意外に速やかであった。福康安はこれを乾隆の作戦と指示の賜物と報告し、乾隆は奏折のその個所に「實天恩、感謝不盡」（實に天恩にして、感謝盡きず）と朱批を認めた¹¹。【第四圖】「大剿逆苗攻解松桃之圍」は福康安による松桃廳城の解圍を描いている。

こうして清軍はついに盤石營、正大營、松桃廳の圍みを解くことに成功した。福康安は乾隆に勝利を報告し、まもなく北から来る和琳と合流する豫定だと述べている¹²。その少し前、和琳も秀山一帯の掃討を着々と進めており、近く福康安と合流して、湖南に赴く手筈だと報告している¹³。【第二圖】「剿捕秀山苗匪至湖南界」の御製は和琳のこの奏折に基づいたものである。しかし「至湖南界」というのは單なる今後の作戦計畫にすぎず、実際に兩將軍が會同し得たのは閏2月28日¹⁴、彼らが湖南への本格進攻を開始したのはすでに3月に入ってからであった¹⁵。

さて四川の秀山から貴州境に入り、松桃廳城を目前にした和琳は、中間に横たわる椽木山（炮木山）¹⁶が苗賊の巢窟で、彼らは清兵の來るのを手ぐすね引いて待っているという情報を得た。そこでまずここを落とす必要があると考え、閏2月22日の夜から兵を三路に分かって、その攻略に取り掛かった。敵は有利な地勢を利用して、果敢に攻撃してくるのを、清軍は火力で壓倒し、やがて翌日の陽が昇り、晝になる頃には椽木山を占據した。和琳はその日のうちに戦捷を乾隆に報告した¹⁷。【第三圖】は「攻克椽木山」と名付けられていて、それだけを見ると、この和琳の奏折に基づいたかと誤解しかねないが、乾隆の御製序をよく讀むと、そうではな

¹¹「福康安奏剿通松桃圍城及沿途打仗情形折」（乾隆60年閏2月15日、同2月26日批）『檔案史料』中冊、353-354頁。

¹²「福康安奏銅仁正大一帶後路寧謐折」（乾隆60年閏2月23日批）『檔案史料』中冊、341頁。

¹³「和琳奏俟秀山一帶肅清即與福康安會合進兵湖南折」（乾隆60年閏2月3日、同閏2月20日批）『檔案史料』中冊、325頁。

¹⁴「諭福康安等事完後毋許客民再與苗民私相往來交易」（乾隆60年3月19日）『檔案史料』中冊、444頁。

¹⁵「福康安等奏官兵已抵楚境折」（乾隆60年3月8日、同3月21日批）『檔案史料』中冊、448-450頁。

¹⁶ここは四川貴州境の椽木山で前出のものとは異なる。

¹⁷「和琳奏攻克炮木山等情折」（乾隆60年閏2月23日、同3月9日批）『檔案史料』中冊、402-404頁。

いことが分かる。これは翌3月、福康安、和琳の連合軍が、貴州湖南境にある椽木山（炮木山）を攻略した情景を詠んだものなのである¹⁸。御製詩はもと12首しかなかったものを、戦圖が16枚であったために、4首が後に補われた。これはその第一である。もちろん圖は和琳を描いたもので、乾隆の題詩が誤っているという可能性もなくはない。いずれにせよ御製序の指示する限りでは、この圖冊の順序は時間の流れに従っていないことになる。

楚境の掃討

いずれにせよ松桃城の解圍を果たした福康安と和琳は、いよいよ所期の計畫どおり湖南へ向かい進軍した。いよいよ苗疆の腹地に入る譯である。目指すのは永綏廳城の解圍と黃瓜寨への進攻。しかしこの地域は石三保率いる起義軍の強力な地盤であり、至るところ無數に苗民のとりでが設けられている。各處での激烈な戦闘が豫想された。

【第五圖】以下はこれら楚境における多くの戦闘のうち、清軍にとって重要な幾つかの場面を描いたものである。もとより清朝側の立場から描かれたもので、起義軍側の勝利の場面などあり得るはずもなく、すべて清軍の壓倒的な武力の前に、苗兵が散々に打ち破られ、逃げまどう情景に終始している。とりわけ噴煙をあげる大砲や銃の威力が強調されている。起義軍にも多少鐵炮の備えのあったことが知られているが、火力においては清軍とのあいだに大きな懸隔があったことは否定できない。

ただこれらの戦圖の配列順序は必ずしも戦闘の發生時間と一致しない。詳細については後で觸れることにしたいが、ロシア所藏のこの圖冊は一應時間軸に沿って配列しようとしたものと思われるが、上で【第三圖】についても見たように、一部誤解によって圖が前後しているのである。しかし今はとりあえず正しい時系列に従って見ていくことにしよう。

まず【第六圖】「大剿土空寨苗匪解永綏城圍」の主題は永綏廳城の解圍、これは3月15日の出來事であった。この日、清軍は起義軍の要塞土空（土孔）寨を攻めた。土孔は河に面して山に圍まれ、そこに通ずる道は極めて險阻である。さらに守備する苗兵は2、3千人を下らず、清軍の作戦はすこぶる困難を強いられたが、長時間に及ぶ忍耐強い攻撃を繰り返し、ついにここを陥落させた。清軍はその勢いを驅って永綏城に殺到、80餘日の長きにわたり援軍を待つて籠城していた官兵

¹⁸この戦については「福康安等奏官兵已抵楚境折」（乾隆60年3月8日、同3月21日批）『檔案史料』中冊、448-450頁を参照。

や老若男女は、歡呼して福康安を迎えた¹⁹。圖では右に土空寨が、左に遠く永綏城が見える。

【第五圖】「攻克蘭草坪滾牛坡剿戮苗衆」に附された乾隆の御製詩のはじめには「永綏雖解圍、苗寨聚猶衆」（永綏は圍みを解くといえど、苗寨には聚まること猶衆し）とあって、これが永綏城解圍のあとの出來事であると分かる。清軍は永綏解圍のあとも、相変わらず近邊で活動を續ける苗軍の掃討を繼續していた。蘭草坪（濫草坪）は山岳地帯で、險阻な地勢に據って苗軍が陣を敷いていた。3月の下旬、清軍は精兵を投入し、その攻略を行った。雨が續き、道は泥濘にまみれ、行軍もままならない中、敵は濃霧に乗じて襲いかかる。農民軍の本據は蘭草坪西北の崖板寨一帯の切り立った亂石のなかにあるらしい。清軍はわずかな場所を見つけて砲を据え、それを敵に打ちかけた。清軍が一齊に山を攀じ登り突撃すると、崖板寨から苗兵が陸續と繰り出してくる。その數、6、7千。そこで清軍はさらに大砲をぶっ放すと、敵兵が石とともに落ちてくる。圖に清軍の砲撃で吹き飛ばされる苗兵の姿が描かれている。苗兵は逃げ隠れ、山上に残る起義軍は必死に抗戦するが及ばず、かくして蘭草坪のとりでは陥落した。

同じ日、永綏附近で銃聲が響いたので、額勒登保らを差し向けると、永綏へ食糧を輸送中、滾牛坡で苗兵に襲われ戦闘中だという。ここは永綏への交通の要路にあたり、食糧や兵員の輸送に必ず通過する地點である。ここが起義軍に奪われると、影響はすこぶる大きい。花連布らも驅けつけ、晝をはさんで3、4時間、激しい戦闘が行われ、ようやく賊を平らげた。清兵は一方で逃げた賊を追い、また一方で永綏まで食糧を護送した。時にバケツをひっくり返したような土砂降りであったという²⁰。

こうした幾つかの局地戦がいずれも清軍の勝利に終わった結果として、石三保は次第に自らの本據地である黃瓜寨一帯に勢力を集中せざるを得なくなっていた。清軍にもたらされる情報も、ここに石三保や石柳鄧ら叛亂の首謀者が集結していることは明らかであった。それを見た福康安はついに黃瓜寨へ軍を進めることにし、4月6日、雲南、貴州、四川の主力部隊を率い、進攻を開始した。福康安はみずから地望を觀察し、黃瓜寨に至るには榔木陀の西、登高坡の山梁を経る道があり、また登高坡の右手（西側）に狭いながら老虎灣を経る道の、二つの道があることを確認した。その結果、陽動作戦を採ることにし、先ず四川提督穆克登阿率いる大軍を榔木陀に集め、敵方の西側の防備が疎かになったのを見計らい、主力部

¹⁹「福康安等奏進剿土空各苗寨及迅解永綏城圍折」（乾隆 60 年 3 月 16 日、同 3 月 28 日批）『檔案史料』中冊、458-460 頁。

²⁰「福康安等奏攻克蘭草坪山梁及滾牛坡一帶折」（乾隆 60 年 3 月 26 日、同 4 月 7 日批）『檔案史料』中冊、479-481 頁。

隊を登高坡及び老虎灣から一路黃瓜寨へ進攻させたのである。こちらは額勒登保が率いた。榔木陀に大軍が現れたのを見て、石三保や石柳鄧はこれぞ福康安の本隊と考え、まさに雌雄を決しようと起義軍の主力を投入してきた。戦闘は三日三晩に及んだ。穆克登阿はしばしば石三保に打ち破られ、かの花連布も手ひどい傷を負った。しかし石三保はまんまと計略にかかったことをまだ知らない。

榔木陀で激戦が繰り広げられている頃、主力部隊は雨の中、山中の細道を辿っていた。10日の午後、雨は小やみとなり、夜にはすっかり止んでしまった。その夜更け、一切の手筈を整えた清軍は、5路に分かれて攻撃に移った。來襲に気付いた苗兵は銃を打ち掛け、死にものぐるいで應戦する。夜も明け、朝の8時頃、雨がまた降り出し、風も強くなった。清軍はその中を突き進み、黃瓜山の頂を占據した。苗兵たちはみな山の背後の黃瓜寨に逃げていく。清軍は殘兵を追って、黃瓜寨へと前進するが、道が険しい上に、至るところ落とし穴があったりして、速度は緩慢である。また夜が来て、雨は強くなり、やがて土砂降りになった。ようやく深夜になって雨風が止んだので、勇を鼓して更に進撃し、ついに黃瓜寨の本據に到着、まる一日に及ぶ起義軍の最後の抵抗を抑えて、4月13日、黃瓜寨を占據した。【第七圖】「攻克黃瓜寨賊巢」にはその有様が描かれている。捕らえられた苗民は隴老章をはじめ100餘名、その中には漢奸（漢族でありながら、苗族の叛亂に加擔したもの）の楊天才の名もあった²¹。黃瓜寨占領後、福康安は附近の苗寨72個所に火をかけて一つ残らず焼きはらい、近邊の石組みや木柵を全部打ち壊させた。のみならず石三保の祖先の墓所を掘って、尸骨を取り出し、兵士に命じてそれを粉々にしたあと、尿をかけ、さらに焼いて灰にし、四散せしめた。捕らえられた苗族婦女は陵辱され、殺された。

捕らえた苗民を取り調べたところ、石三保を“吳王”と稱するものもいれば、いや“吳王”は吳隴登だ、あるいは吳添半（吳天半）²²だと言うものがあり、供述が一致しない。首謀者を特定したい福康安としては、まことに齒痒い限りであった。ところが蘇麻寨に居る吳添半が本物の“吳王”で、石三保も石柳鄧も彼に服屬しているという供述があり、どうも本當らしい。吳添半が首魁とすれば、何を措いてもこちらを先に捕獲すべきということになり、蘇麻寨への進攻が行われた。4月19日、福康安率いる本隊を加え、都合4路から進軍を開始、21日に蘇麻寨で相會す

²¹「福康安奏攻克黃瓜寨擒獲隴老章等折」（乾隆60年4月28日批）『檔案史料』中冊、504-506頁。

²²吳添半あるいは吳天半が本名だが、のちに乾隆が故意に吳半生と改めた。乾隆60年9月15日批の「福康安等奏遵旨將吳天半改寫吳半生片」（『檔案史料』下冊、51頁）に「臣等欽奉諭旨……此後即照此改寫、以示釜底遊魚克日生擒之意」とある。“釜底遊魚克日生擒”というのは「もはや釜の中の魚で、すぐにも生け捕って料理してくれよう」というほどの意味で、だから“半生”だといふのである。したがって乾隆の御製をはじめ、清朝の史料ではこう書かれる。

る手筈である。石の砦や木柵、巖陰や樹々の間から不斷に打ちかかる苗兵を、清軍は火力に任せて打ち破り、着實に前進して行った。沿線ごとに火をかけた苗寨は、夜に入っても燃え続け、赤々と天を照らした。夜半、交替して兵を休ませた後、夜明けとともに蘇麻寨など幾つかの部落に對し攻撃の火蓋が切って落とされた。凄惨な白兵戦が演じられたが、やがて清軍はとりでに大砲を打ち込み、木柵を抜去して敵の本陣に突入した。忽ちにして火が起こると、備蓄した火薬が爆発し、その大音響は邊り數里に響き渡った。爆死した者も數知れず、蘇麻寨は清軍に占據された。捕らえられたもの80餘名、その中に隴老瓦というものがあつた。鍛冶屋で、起義軍の銃彈作りを擔當していたという。その供述は先の捕虜のそれと同じく、吳添半こそが“吳王”で、石三保らはその配下だという²³。【第八圖】「攻克蘇麻寨一帶賊巢」はこの戦闘の情景である。

首魁の捕縛と福康安の死

ここに來て、俄然吳添半首魁説が浮上してきた。事の眞實はともかく²⁴、福康安と乾隆の間ではその線に沿って作戦が展開していたように見える。惡むべきは吳添半、速やかに捕らうべし。

8月に入って長雨が續き、四面濃霧に閉ざされ、楊柳塘で行き悩んでいた福康安の軍は、23日、爽やかに晴れ渡つたのを期に、いざ出發せんと探索を進めた。いづれ周りはずべて苗寨だが、茶它地方には集結する苗兵の數がことさら多く、全山に無數の石や木のとりでが作つてあるという。そこを目指して兵を進めると、毛豆塘あたりで敵の數が増えてきて、攻撃が激しくなつた。清軍は兵を分かつて雨上がりのぬかるむ險路を前進し、敵のとりでを抜いて行く。銃や弓、さらには大砲を動員し、猛攻を仕掛けると、敵は支えきれずに崩れ去る。こうして毛豆塘の苗寨はずべて陥落した。翌24日はいよいよ茶它に向けて進攻する。途上の苗寨を攻め落とし、焼き拂い、猛煙が天空に廣がるなかを、まさに破竹の勢いでさらに柳尙へと向かう。この間、2、3日のうちで、苗寨の投降するものを絶たず、都合70餘所、そこには栗林、排若、苟若など名のある聚落も含まれていた。吳添半の行方を尋ねるが、彼らは隨所に動き回っているために、決まった居所がないという。しかし現今の情勢では、彼らが日々行き詰まりつつあることは明らかで、脅

²³「福康安奏攻克蘇麻寨逼近西梁折」（乾隆60年5月7日批）『檔案史料』中冊、515-518頁。

²⁴吳添半が“吳王轉世”を名乗っていたことは事實である。しかし當時苗民の名望を集め“吳王”の實質を備えていたのは吳八月であつたらしい。吳八月は、乾隆60年8月、平隴で開催された起義軍の大會で正式に“吳王”に選出された。吳榮臻『乾嘉苗民起義史稿』82頁。

されて叛亂に加わったものたちもみな投降を願い出た²⁵。呉添半の捕縛も近いことと思われる。【第十圖】「攻得茶它柳弁等處賊巢」はこの時の戦闘を描いた圖だが、次の【第九圖】とは順序が逆になっている。

ついに呉添半の捕縛される日が訪れる。それは9月20日の出来事であった。呉添半の行方については、日頃より探索にこれ努め、手懸かりがあれば馳せ知らせるように命じてあった。そこへこの日、呉添半が鴨保寨から高多寨へ來たり、いましも苗兵を糾合しているという情報もたらされた。福康安らは、それを聞かぬや勇み立ち、滿漢の將兵を引き連れ、高多寨を指して急行、寨の四面を包圍した。水の漏れる隙間のないほど完全に包圍され、もはや逃げ場のないのを知った呉添半は2名の仲間とともに、寨を出て投降した。福康安の奏折によれば、呉添半は匍匐して馬前に進み、再三叩頭して命乞いをしたというが、これは朝廷側の記録で、必ずしもあてにはならない²⁶。ただ【第九圖】「攻克高多寨生獲逆首吳半生」には正にその情景が寫されている。馬上の二人はおそらく福康安と和琳であろう。呉添半捕縛の報を得て、乾隆の喜びは一方ならず、その日のうちに、福康安は貝子^{ベイゼ}²⁷に、和琳は一等宣勇伯に封じられた²⁸。呉添半はやがて北京に護送され、死罪となった。

8月以來、起義軍の根據地は次第に平隴に收斂しつつあり、すでに呉八月を“呉王”とする苗民政府が成立していた。しかし呉添半の捕縛は起義軍にとってはやはり大きな打撃であり、一部の指導者や兵士の間には激しい動揺が見られるようになった。そこへ起こったのが呉隴登の寝返りである。乾隆60年11月3日の朝、鴨保寨の近く臥盤寨で作戦の指揮を執っていた呉八月は、呉隴登の手の者によって捕らえられ、清軍の本營に引き渡された。そして翌年（嘉慶元年）3月25日、人々の面前で肉を割かれ、義に就いたのである。呉八月は、読み書きも相當に出来るほか、武藝にも秀で、90斤（約45キロ）の大關刀（關羽にちなんだ三日月形の大刀）を自在に操った²⁹。また岳父から苗族の傳統宗教を受け継ぎ、年長ということもあって、苗民の人望を一身に集めていた。まことに“呉王”に相應しい存在であった。一方、呉隴登はといえば、當初から起義に参加していたものの、その舉動には疑わしい點がままあった。そもそも乾隆56年の勾補事件で、鴨保寨に石滿宜を匿したのはこの人物だが、その時も清軍に石滿宜を差し出したという疑惑を持たれて

²⁵「福康安奏進攻茶它柳弁等處苗寨折」（乾隆60年8月27日、同9月11日批）『檔案史料』下冊、45-47頁。

²⁶「福康安等奏生擒吳半生折」（乾隆60年9月21日、同10月3日批）『檔案史料』下冊、66-67頁。

²⁷清朝の爵位で、固山貝子 *guusai beise* の略。親王、郡王、貝勒の下で、宗室以外では最高位。

²⁸乾隆60年10月3日「諭內閣福康安和琳及隨同打仗出力將備兵辦俱優嘉獎賞」『檔案史料』下冊、68頁。

²⁹呉八月が實際に用いた“八月刀”は現在湖南省吉首州博物館に保存されているという。

いた。したがって呉八月の捕縛についても、早くから清軍と話が出来ていたとも言われている。呉八月を失った後、“呉王”に選出された呉庭禮は、報復のために呉隴登の據点である鴨保寨を襲撃して、その家を焼いたが、呉隴登は福康安とともに逃げ失せた。その後、呉庭禮は病に倒れ、その後を弟の呉庭義が継承した。

翌、嘉慶元年（1796）5月12日、石三保が捕らえられた。石三保はいよいよ情勢が厳しくなるなか、平隴、乾州への圧力を少しでも軽減すべく、北方の保靖地域に新たな戦場を求めようとしていた。そこで自らの部隊を率い、かねてから連絡のあった呂洞山の石把山のもとへ赴いた。石把山は水田に留まってはどうかと言うので、その地を調べてみると地勢はいかにも好い、攻守に便利な土地であった。さらに聞けば、水田の東北にある哄哄寨は、その険しい地形が根據地にうってつけで、しかもその地の土家族（清朝の史料では土蠻）の頭目龍子貴とはこれまでも付き合いがある。土家族との連携は起義軍にとっても重要である。石三保の心は決まった。ところがこの時、すでに奸計は仕掛けられていたのである。この頃、清軍は、乾州、平隴から10數里の廖家冲にあったが、石三保の保靖での動向はここにも逐一報告されていた。龍子貴がすでに清軍側に付いていたことは言うまでもない。石三保が哄哄寨に入ったとの知らせを受けた湖北宜昌鎮総兵張廷彦は配下を引き連れて同地に急行、5月12日自ら石三保を捕縛し、晝夜兼行して17日には廖家冲の本營に護送した³⁰。【第十一圖】「攻克廖家冲生擒首逆石三保」には、引き立てられる石三保の姿が描かれている。その後、石三保は北京に送られ、7月18日凌遲刑に處せられた。

ところが石三保が捕縛された翌日の嘉慶元年5月13日、福康安が陣中で死んだ。突然の出来事であった。和琳の報告³¹では病死とされ、その病状の推移から投薬の処方までが詳しく述べられているが、果たしてその死因が確かに病死であったか否かは分からない。少なくとも苗族のあいだでは起義軍との戦闘で死んだものと伝えられている³²。総指揮官は和琳が引き継いだ。乾隆にとって最も信頼の置ける福康安が陣中で没したことは、この戦争にとって大きな轉換点となったことは確かである。

³⁰ 「姜晟奏于哄哄寨擒獲苗首石三保折」（嘉慶元年5月29日批）『檔案史料』下冊、224頁。「和琳奏擒獲石三保折」（嘉慶元年5月18日、同6月4日批）『檔案史料』下冊、227-229頁。

³¹ 「和琳奏福康安猝患時症溘逝折」（嘉慶元年5月14日、同5月29日批）『檔案史料』下冊、223-224頁。

³² 吳榮臻『乾嘉苗民起義史稿』98頁。

叛亂の鎮定

起義軍の指導者たちが相次いで捕らえられ、多くのとりでが陥落していく中で、戦争は最終局面に向かっていた。乾州廳城といえば、叛亂のごく初期にここを陥落せしめて以来、一年半の長きにわたり起義軍の軍旗はためく苗族農民政府のシンボリック的存在であった。嘉慶元年6月17日、その乾州城がついに清軍に奪還された³³。【第十五圖】「收復乾州」はその有様を描いている。

福康安の存命中、何度も敵の大本營平隴の攻略が試みられた。しかし平隴は四面みな山という險阻な地形に守られ、その試みはことごとく失敗に歸していた。和琳はまず乾州を落とし、それから十分な準備の上で平隴の攻略にとりかかる方略を立て、すでに乾隆の裁可を得ていた。一方、起義軍のほうでも呉庭義や石柳鄧といった首領たちは、もはや平隴と乾州の両者をともに守ることは困難と考え、乾州の放棄を考えていた。6月16日、彼らは乾州城内の官衙や倉庫、軍營を焼き拂った後、東西南北の城門を打ち壊し、涙を飲んで撤退していった。清軍の乾州城奪回はかくして極めて順調に行われた。

残すは平隴のみ。しかし周りにはなお多く苗民のとりでがあり、先ずはそれらを撃破して行かねばならない。強虎哨はそういった平隴周辺の重要なとりでの一つである。和琳は8月5日からその攻略に着手し、敵の執拗な抵抗を抑え、8月9日に強虎哨の山梁を占據した。近隣の苗村の頭目たちは、平隴の陥落も近いと見てか、續々と軍營に來たって命乞いをした³⁴。【第十六圖】「攻克強虎哨」がその情景である。

戦争の終結も間近と思われたその月の末、何と和琳が死んでしまった。湖南巡撫姜晟からの知らせによれば、やはり病死である³⁵。福康安と同じく、死因についてはこの場合も疑問がなくはない。総指揮官は臨時に額勒登保が擔當した。和琳は6條からなる『湖南苗疆緊要善後章程』を起草、比較的穩健な方針を打ち出し、事態の收拾を模索していたが、その死によって休戦の協議は破産に追い込まれた。

9月11日、額勒登保に代えて明亮を總指揮官とする上諭が發せられた³⁶。明亮は10月初旬には乾州城に入り、本格的な平隴の攻略が開始される。明亮は乾隆30年(1765)、伊犁領隊大臣に任ぜられたのを皮切りに、緬甸、金川、蘭州を轉戦したヴェテランである。とくに金川平定の勳功により一等襄勇伯に封じられていた。

³³6月17日當日の和琳の奏折が缺けていて、不明の點はあるが、「和琳奏連日搜捕乾州附近苗民竝設法疏通河溪道路折」(嘉慶元年6月23日、同7月8日批)『檔案史料』下冊、240-245頁によって乾州の奪取が6月17日であったことが分かる。

³⁴「和琳奏攻占強虎哨及勞神寨等處折」(嘉慶元年8月23日批)『檔案史料』下冊、281-282頁。

³⁵「姜晟奏和琳病逝折」(嘉慶元年9月11日批)『檔案史料』下冊、294-295頁。

³⁶嘉慶元年9月11日「諭明亮鄂輝赴湖南代額勒登保總統軍務」『檔案史料』下冊、296-297頁。

平隴に對する清軍の攻撃はすでに一年來斷續的に續いていたが、いまやその最終段階に差し掛かっていたのは、敵味方を問わず、誰の目にも明らかであった。明亮は和琳がすでに着手していた東南からの進攻案を採用した。西方からの進攻は地形が險阻な上、防備が堅固で、すでに福康安が試みて失敗していたからである。そこで打狗坡方面を目指して10月10日に進發、本營の守備兵から2千餘名を選び、新寨、黃毛坡に軍を進めた。途中、苗寨を過ぎるごとに、すでに歸順した苗民に對し、平隴の陥落も近い、石柳鄧らが何處かに潜んでいれば、その捕縛に協力せよ、そうすれば恩賞が與えられる、と觸れて回った。新たに歸順するものは2千餘戸を下らなかった。12、13日、清軍の掃討に對して諸處で激しい抵抗が見られ、彼らは銃砲を撃ちかけても退散しない。14日の朝、陣地でしばし休憩に入ったところを、また激しい攻撃に襲われる。ちょうど額勒登保が兵を率いて駆けつけたところで、各陣地から銃砲を打って退散させる。このあたりにも至るところ塹壕やとりでが築かれているが、平隴の大寨一帶に潜む敵はずっと多いにちがいない。15日更に援軍が到着したので、兵を分かつて打狗坡の山梁を占領させた。17日未明、將士を勵まし前進、軍を4路に分ける。額勒登保たちは獅子坡から、明亮たちは觀音坡から、德楞泰たちは巖人坡から、鄂輝たちは甲式溝から、それぞれ敵の本據を目指す。さらに興肇たちが石老巖一帶の山梁に大砲を列べて砲撃する。最後の攻撃が始まった。苗兵は無數に作られた石のとりでや木柵に身を隠し、そこから攻撃してくる。清軍は、銃を放ち、火彈を用い、火矢を打ち込んで追い詰める。最後のとりでを打ち破ると、そこは敵の本據地吳八月の寨である。逃げまどう敵を尻目に、清軍は火を放って焼き拂う。晝になり、戦闘が一段落、敵の頭目の搜索に入った頃、平隴の本據が陥落したのを聞き、莽車、孟水冲などから1、2千人の援軍が駆けつけ、さらには平隴東北の貴魚坡一帶から1千餘の苗兵が平隴寨の西に押し寄せて來た。清軍は阿哈保と達音泰に命じて莽車、孟水冲の敵に当たらせ、綸布春、三音庫に命じて貴魚坡の賊を討伐、興肇にも石老巖を下ってこれに加わらせた。午後4時頃には、敵も支えきれず、散り散りに逃げ失せた。こうして苗族農民起義軍政府の本據地平隴は陥落した。【第十二圖】「官兵攻克平隴賊巢」に描かれるのがその情景である。この戦いで、敵兵45の首級を挙げ、多數の武器を鹵獲した。また捕らえた苗兵を尋問したところ、石柳鄧らの首魁は、必ずや貴魚坡、孟水冲など東北の苗寨に隠れているという³⁷。

平隴の近く養牛塘に、石柳鄧がとりでを築き、嫌がる苗民を脅迫して誘い込み、なおも抵抗する構えであると聞き、明亮はその掃討に乗り出した。10月25、6日以後、天候は急激に寒くなり、28、9日頃には雪が降り出し、やがて大雪となる。

³⁷ 「明亮等奏攻克平隴情形折」（嘉慶元年11月1日批）『檔案史料』下冊、323-324頁。

雪が積もって道が見えない。11月2日の夜に入って、雪が止み、雪も融け始めた。3日の朝、二手に分かれて進軍、養牛塘山頂の攻略を目指す。敵も必死に打って掛かる。道が狭いため、敵の攻撃の的になる。そこで少しずつ陣地を確保し、銃と砲を打ちかけては前進、山頂に肉薄する。こうして養牛塘の山頂は占領された³⁸。【第十三圖】「捷來」がその情景を描く。ただここでも石柳鄧を捕らえることはできなかった。ちなみに【第十二圖】【第十三圖】はこのように最後に来るのが正しい順序である。

叛亂の指導者でほとんど最後に残った石柳鄧が壮絶な最期を遂げるのは、12月6日或いは7日のことである。12月3日、清軍は貴魚坡一帯を掃討し、30餘所のとりでを攻略した。その折りに捕獲した呉老化を尋問したところ、石柳鄧や呉庭義たちは、この日の負け戦で、手下も過半を失い、みな散り散りに逃げたのだという。恐らくはもはや袋のネズミであるに違いない。12月5日深夜、清軍が貴魚坡附近の討伐を進めると、所々に苗兵が現れる。注意して見ると、これらの苗兵は貴魚坡から險路を傳って往來しているらしく、その場所はちょうど平隴の背後に当たり、山に囲まれた石隆という土地であった。苗寨も非常に多く、残兵がここに潜んでいる可能性が高い。そこで先ず貴魚坡への道を塞ぐ一方で、周りの山をすべて圍い込むことにし、6日の夜になるのを待って進發、夜半には全隊部署につき、攻撃を開始した。敵は窪みに隠れて、下から應戦する。もはやこれまでと思いつつ、なおも抵抗を止めない。守備の王泰和と把総の康恆彩は、兵を連れて決死の覚悟で寨内に突入したが、苗兵に圍まれて討ち死にするほどであった。しかし衆寡敵せずやがて戦闘は清軍の勝利に終わる。すでに7日の朝になっていた。捕らえられた苗兵の中に石老喬というものがいた。石柳鄧の甥で、小さい時分から石柳鄧に育てられ、息子同然の存在である。その供述によると、石柳鄧は頭に負傷し、寨の奥に潜んでいるところを清兵に襲われ、首級を取られたという。首實檢をさせてみると、間違いなく石柳鄧のものであった³⁹。【第十四圖】「攻克石隆苗寨陣斬石柳鄧」には、その石隆の戦闘の情景が描かれている。

いま一人“呉王”呉庭義の行方はどうなったであろうか。捕獲された石老喬の供述によれば、呉庭義は貴魚坡の戦で傷を負って逃走したという。捨て置くわけには行かない。呉庭義はどうしても捕らえねばならぬ。そこで12月11、12の兩日に兵を出し、一帯を搜索させるとともに、平隴近邊の苗寨に觸れを出し、呉庭義を匿っていることが分かれば、その寨はただちに掃討されること、また呉庭義を捕

³⁸「明亮等奏攻克養牛塘等險要隘卡折」（嘉慶元年11月4日、嘉慶元年11月15日批）『檔案史料』下冊、332-334頁。

³⁹「明亮奏斬殺苗首石柳鄧生擒伊子石老喬等情折」（嘉慶元年12月7日、同12月17日批）『檔案史料』下冊、357-360頁。

らえて差し出せば必ず恩賞が與えられることを言い聞かせた。すると三岔坪の呉老季や勞神寨の呉老九、地母村の石五保ら大勢のものが營所に來たつて言うには、呉八月の甥で呉廷梁というものが私どもの寨におります、幸いにこやつをお許し頂けば、呉庭義を連れて参りましょう、さすれば兵を煩わせることもありません、と。聞けばまんざら嘘でもなさそうなので、しかるべくせよと歸したところ、13日になって呉廷梁を連れてきた。さっそく呉廷梁を尋問すると、呉庭義は確かに戦闘で負傷して、現在は老虎洞に隠れております。今日は一緒に出頭しようと申したのですが、罪の大きさを知ってか、よう参りませなんだ。どうか私めをお歸し下さい、呉庭義ばかりか、石柳鄧の一家のものも、みな捕らえて参りましょう、と言う。そこで二日を限って許したところ、15日になって、呉庭義のほか、石柳鄧の次子石老二、石老喬の妻隴乜三、石老二の妻呉喬女、石老觀（石柳鄧の長子、すでに捕縛）の子石隴保を連行してきたのである⁴⁰。嘉慶2年2月19日、呉庭義、石老喬、石老二は北京で凌遲刑に處せられ、石老觀は斬に處せられた。こうして乾隆嘉慶にかけて丸々2年に及んだ苗疆の叛亂は基本的に鎮定された。ただこの戦争を経ても、苗疆の矛盾が解消されたわけではなく、叛亂は幾度も繰り返された。

銅版畫

『欽定平苗紀略』卷首四御製詩に收める「補詠平苗戰圖四章」には次のような注釋を加える。「平苗の役は丙辰（嘉慶元年、1796）の冬に戴^{おさま}り、既に丁巳（嘉慶2年、1797）の春に於て聯句して以て其の事を紀^{しる}したれば^{より}⁴¹、因て舊日の西師、金川、臺灣の例に仿^{なら}い、繪きて戰圖となすことを命じたり。圖凡そ十有六、内十二圖には舊^もと紀功の作あれば、即ち圖上に書せしむ。其の四圖には詩なし。因て補いてこれを成す。」補詠の時期は、戊午年（1798）の孟秋であるから、この時に戰圖16枚の原畫が乾隆の手許に届けられたことが分かる。さらにそれを銅版に彫る時間を計算すれば、銅版圖の完成は早くても嘉慶4年（1799）以降と思われる。

乾隆が自身で言うように、御製詩は12首しかなかったにも関わらず、出來上がった戰圖は16枚であった。命令はただ「西師、金川、臺灣の例に仿^{なら}って」描けというのみで、枚數の指定はない。これらの戰圖は、西域と金川が16枚、臺灣が12枚である。乾隆の積もりでは、御製詩そのものが12首なのだから、當然臺灣の戰圖にならって12枚の圖が出來てくると思っていたかもしれない。しかし造辨處の畫家たちは西域、金川と同じ16枚を描いてきた。乾隆は仕方なく4首を補ったので

⁴⁰「明亮等奏生擒吳廷義及石柳鄧之子」（嘉慶元年2月16日、同2月26日批）『檔案史料』下冊、367-369頁。

⁴¹「平定苗疆聯句」を指す。載せて『欽定平苗紀略』卷首三、また『御製詩餘集』卷九にある。

ある。どれもみな序文だけが長くて、詩そのものは極めてそっけないのは、どうもそのせいらしい。畫家たちと乾隆のあいだで意志の疎通がうまく行っていなかったのであろう。また 80 歳を過ぎ、すでに皇帝の座を譲った乾隆に、以前のような氣力がなかったかも知れぬという問題もある。ともあれ御製詩の紀年にしたがって圖を竝べ換えてみたのが下の表である⁴²。

| | | | |
|---------|--------------|-------------|--------|
| 1 (1) | 興師 | 乾隆乙卯 (1795) | 仲春 |
| 2 (2) | 剿捕秀山苗匪至湖南界 | 乾隆乙卯 (1795) | 仲春上澣 |
| 4 (3) | 大剿逆苗攻解松桃之圍 | 乾隆乙卯 (1795) | 閏春月 |
| 6 (5) | 大剿土空寨苗匪解永綏城圍 | 乾隆乙卯 (1795) | 季春下澣 |
| 5 (6) | 攻克蘭草坪滾牛坡剿戮苗衆 | 乾隆乙卯 (1795) | 孟夏 |
| 7 (7) | 攻克黃瓜寨賊巢 | 乾隆乙卯 (1795) | 孟夏 |
| 8 (8) | 攻克蘇麻寨一帶賊巢 | 乾隆乙卯 (1795) | 仲夏上澣 |
| 10 (9) | 攻得茶它柳秀等處賊巢 | 乾隆乙卯 (1795) | 九秋月 |
| 9 (10) | 攻克高多寨生獲逆首吳半生 | 乾隆乙卯 (1795) | 孟冬上澣 |
| 12 (14) | 官兵攻克平隴賊巢 | 乾隆丙辰 (1796) | 孟冬下澣 |
| 13 (15) | 捷來 | 乾隆丙辰 (1796) | 仲冬 |
| 14 (16) | 攻克石隆苗寨陣斬石柳鄧 | 乾隆丙辰 (1796) | 嘉平月之中澣 |
| 3 (4) | 攻克爆木山 | 乾隆戊午 (1798) | 孟秋之月 |
| 11 (11) | 攻克廖家冲生擒首逆石三保 | 乾隆戊午 (1798) | 孟秋 |
| 15 (12) | 收復乾州 | 乾隆戊午 (1798) | 孟秋 |
| 16 (13) | 攻克強虎哨 | 乾隆戊午 (1798) | 孟秋月 |

乾隆御製題寫年次表

當初の 12 首はそれぞれに出來事の報告を受けて詠んだものだから、だいたい時間の流れに従っているのは當然である。しかしこれら 12 首と補詠の 4 首との間にほぼ 1 年半の時間差があり、しかも補詠 4 首はどれもみな戊午年⁴³の孟秋月に詠まれた應急の作であることがよく分かる。

問題はロシア科學アカデミー東洋寫本研究所の圖冊の配列順序が必ずしも時系列に沿って竝んでいないという點である。天理圖書館に所藏される「征苗戰圖」は卷子本で、順序がやはり異なっている⁴⁴。しかし『國朝宮史續編』に見える「御題平定苗疆戰圖」の順序は「攻克爆木山」を除いて正しい順序に竝んでいるから⁴⁵、宮中では大體正しい順序が傳承されていたと思われる。他の銅版畫の例で言えば、銅版畫は卷子に仕立てられるにせよ、或いは圖冊に造られるにせよ、大抵内務府

⁴²左端の番號はロシア科學アカデミー本のそれで、括弧内は正しい時間順に竝べ換えたもの。

⁴³戊午年とその前の丙辰年の年號はすでに嘉慶であるが、乾隆は相変わらず乾隆と書いている。

⁴⁴天理本では、一軸に「狝苗戰圖」を含めた計 20 圖を貼り込んである。その順序は、ロシア科學アカデミーの番號を用いて記せば、1, 2, 6, 4, 5, 7, 8, 10, 9, 12, 13, 14, (狝苗 1, 3, 2, 4), 11, 16, 3, 15 となって、これも誤りが多い。

⁴⁵『國朝宮史續編』卷 98、北京出版社、1994 年、下册、981-987 頁。

の造辨處内で行われているので、そうだとすればロシアの圖冊の順序はやや説明に窮する。苗疆戰圖の場合は、銅版畫シリーズの中でもほぼ最後に位置するものであり、嘉慶年間に入ってから或いは乾隆の死後には散葉のまま下賜されたこともあったのかも知れない。その場合、装本の際の順序は所藏者によって異なってしまった可能性がある。事實、町田市立國際版画美術館に所藏される苗疆戰圖は16枚が散葉で保存されているらしい⁴⁶。

ただ文中でも見たように、「攻克樺木山」の一枚は、『國朝宮史續編』のように3番目に置くのではなく、4番目に訂正されねばならないと思われる。乾隆の御製序の内容を檔案と対照させて見るならば、これは乾隆60年3月8日に懸げざるを得ないのである。したがって事件の起こった日付とともに、全16圖を正しい順序に並び換えると、以下のようになる。

- 1 (1) 乾隆60年2月14日「興師」
- 2 (2) 乾隆60年閏2月3日「剿捕秀山苗匪至湖南界」
- 4 (3) 乾隆60年閏2月15日「大剿逆苗攻解松桃之圍」
- 3 (4) 乾隆60年3月8日「攻克樺木山」
- 6 (5) 乾隆60年3月16日「大剿土空寨苗匪解永綏城圍」
- 5 (6) 乾隆60年3月26日「攻克蘭草坪滾牛坡剿戮苗衆」
- 7 (7) 乾隆60年3月14日「攻克黃瓜寨賊巢」
- 8 (8) 乾隆60年4月19日「攻克蘇麻寨一帶賊巢」
- 10 (9) 乾隆60年8月24日「攻得茶它柳夯等處賊巢」
- 9 (10) 乾隆60年9月20日「攻克高多寨生獲逆首吳半生」
- 11 (11) 嘉慶元年5月12日「攻克廖家冲生擒首逆石三保」
- 15 (12) 嘉慶元年6月17日「收復乾州」
- 16 (13) 嘉慶元年8月9日「攻克強虎哨」
- 12 (14) 嘉慶元年10月17日「官兵攻克平隴賊巢」
- 13 (15) 嘉慶元年11月3日「捷來」
- 14 (16) 嘉慶元年12月6日「攻克石隆苗寨陣斬石柳鄧」

⁴⁶ 『「中國の洋風畫」展』圖録、町田市立國際版画美術館、1995年。恐らく散葉であるためであろう、この圖録の収録順序がまったく混亂しているのはやむを得ない。莫小也「銅版組繪《平定苗疆戰圖》初探」『故宮博物院院刊』2006年第3期（総第125期）がすでにその誤りを指摘し訂正しているが、同氏は補詠の4圖は「乾隆が、今次の掃討戰で世を去った將領福康安、和琳を偲ぶ作で、どちらかといえば獨立性が高い」とし、別立てにすべきだとしているのは納得しがたい。上に見たように、補詠部分を含めて16圖の定まった順序は存在していたのである。